

大垣市文化財保護協会

会報

平成 24 年 6 月 17 日発行

第 36 号

設立40周年記念号



▲市指定重要文化財（建造物）「無何有荘 大醒樹」

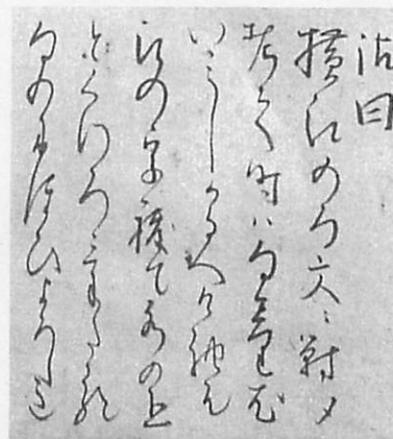
奥の細道むすびの地記念館が大垣の宝となる日

名古屋大学文学研究科教授

塩村 耕

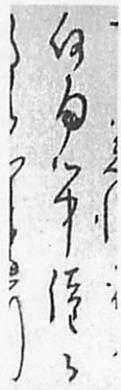
去る四月八日、大垣市船町の谷木因旧居跡地に「大垣市奥の細道むすびの地記念館」（以下「記念館」と略称）が開館、その準備段階で、畏友の佐藤勝明さんとともに、展示の総合監修者としてお手伝いをした。日本の古典文学作品を正面から取り上げた博物館は、おそらく日本では外に類を見ないのではなからうか。それだけに参照すべきお手本もなく、何をどのように見せたらよいのか、苦心した。そもそも『奥の細道』を万人向けに展示で見せることは難事業で、この仕事を通して芭蕉の文学について、あらためて考え直す機会を得た。

たとえば、最近得られた、ささやかな発見を紹介しよう。図版①は元禄六年（一六九三）四月、大垣の蕉門俳人荊口に宛てた芭蕉書簡の一部分である。近作の芭蕉句「ほととぎす声や横ふ水の上」と「一声の江に横ふやほととぎす」の句形のどちらがよいのか、優劣を論ずる議論のあったことを報じている。芭蕉晩年の筆蹟の中でも殊に出来が良く、心を込められて認められており、荊口を重んじていたことがそれだけで直観される名品だ。さて、図版の三行目の半ば以下、「句量尤いみじかるべければ…」と従来読まれてきた。が、「句量」というのが外に用例を見ない言葉で、いまひとつ腑に落ちなかった。

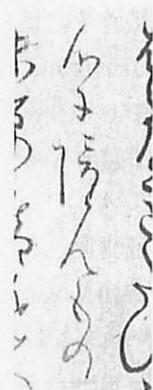


図版①

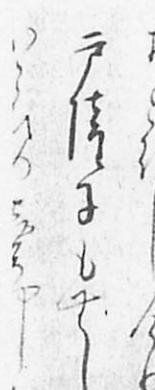
開館記念の企画展示に、本書簡の現物が出品できるというので、翻字を準備するために写真をじっくりとらんでいたところ、ふと頭にひらめいた。ここで、参考のために芭蕉の筆蹟より取った図版②～⑤をご覧ください。



図版②



図版③



図版④



図版⑤

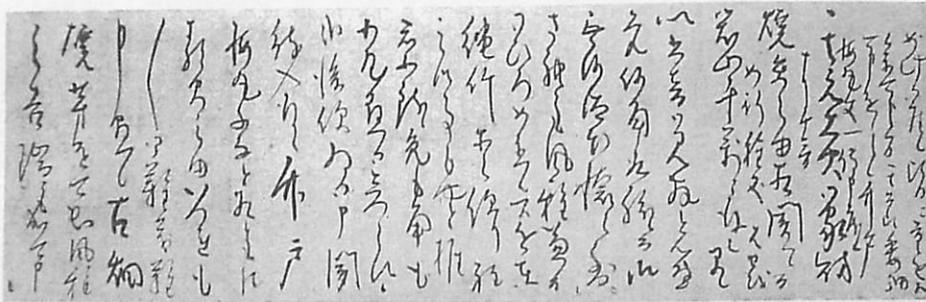
②は貞享三年（一六八六）十二月、鳴海の寂照宛書簡、③は元禄二年三月、岐阜の落梧宛書簡、④は元禄三年六月、「市中は」歌仙、⑤は元禄四年ごろ、京の去来宛書簡の一部だ。

これらは「障」字を含んでいる。芭蕉には時々、世の中に存在しないウソ字を書く筆癖があり、この「障」もその一つで、何れも傍の部分「章」ではなく「童」のような形に書いている。通常、このようなウソ字が出てくると偽筆と判定する根拠となるのだが、芭蕉の場合にはそれだけでは鑑定で

きない。

こういう筆癖は、楷書をきちんと学んでいなかったことを示している。江戸期の人、ある程度富裕な家に育ち、漢学の先生についてきちんと学んだ人以外は、草書しか学ばなかったために、かえって楷書が苦手で、読むことは出来てもちゃんと書けない人が多かった。芭蕉と同時代を生きた西鶴も同様で、たとえば「像」字を肉月に象の字体で記したりしている。これは二人が共通して、高度な教育を受けるような少年時代を過ごさなかったことを物語っている。念のために言っておくと、だから二人とも偉いのであって、伝統の壁を打ち破るような大きな仕事を果たしたのだ。

閑話休題、^{それはさておき}図版①の問題の一字は、これらの「障」字の旁にある「章」字と同じということに気付くであろう。すなわち「句章尤いみじかるべければ…」と読むべきであって、「句章」ならば「章句」と同意で、文意もしみじみ納得される。ただ、この一字だけを眺めていたのでは、容易に気付かれにくい読みではある。昔の人の残したものを読むことは、かにかくに難しい。



図版⑥

もう一つ、記念館の通常展示に掲げてある芭蕉書簡を見てみよう。図版⑥は元禄五年十月十三日付、大垣の蕉門俳人、如行に宛てた書簡だ（部分）。この年九月四日、大垣城下を大火が襲い、如行の家も類焼した。その火事見舞いだ。こういう手紙は書くのが難しい。が、ありきたりの文面になっていないところがさすがで、「文学者」芭蕉の本領が現れている。

そこには「されども風雅、兼て御ひろめ置候へば、近在縄竹等之便り程之御事もやと推量致候。兎も角も小屋懸御しつらひ候哉…」とある。つまり、あなたがかねてより風雅（俳諧）を広めておいたおかげで、近在の門人から縄や竹くらの援助は得られたでしょう、とりあえず小屋がけくらの復旧は出来ましたか、と尋ねている。火事で家を焼かれた相手に対して、なかなか言いにくい表現ではないか。なんでわざわざこんな言い方をしたのか。

この手紙の「味」を理解するためには、同じく記念館の通常展示に掲げてある元禄五年二月十八日付、膳所の曲水宛、世に「風雅三等の文」と称される芭蕉書簡を味読していただかねばならない（この手紙にはさらに複雑な含意があるので、是非展示をご覧くださいよう）。そこでは世の中の俳人たちの営みの多くを、遊戯ないし遊芸的なものとして一蹴し、自分たちのように、定家や西行、杜甫といった古人の境涯に達するために俳諧を追求する者は日本中で十人にも満たないと嘆息している。つまり、芭蕉は職業としての俳諧を否定し、古人のような^{こじき}乞食求道の姿勢を、重要な門人には求めていたことがわかる。前の如行に宛てた「縄竹等之便り」「小屋懸」云々の文言は、類焼という物質的危難に際して、その高踏的な精神をあらためて確認しているのであって、そのことは如行が芭蕉の門人の中でも重要な位置を占めることをも意味している。芭蕉の俳諧は机上のものではなく、生き方そのものにかかわる事柄であった。

ここで、記念館の展示作りにおいて、特に意を用いたコンセプトについて語っておきたい。記念館

の最大の目的とは、真の意味の文化施設—つまり、未来にわたり、そこで人々が教養を涵養し続ける場—となることである。ここでいう「教養」とは何かというと、書物（文献）を通して、古人と感と同じくする体験を積み重ねることにほかならない。現代日本の醜悪はすべて、死者（古人）を軽んじていることに由来するといって過言でなく、その現状に異を唱えたいというのがこの施設だ。

ところが、時を隔てれば隔てるほど、書物を通して古人と交信することは簡単ではなくなる。言葉や描かれる事物が時代とともに変化するし、前述した例のように、文字を解説することさえ時に難しい。手紙は古人の人間性に直接迫る最高の資料だが、第三者が読むことを期待しないだけに、眼光紙背に達する読みを必要とする。あるいは『奥の細道』のように、複雑な典拠の用い方をしたり、説明に言葉を尽くさない難解な文学もある。

しかしながら、言葉や背景について丹念に調べ、文脈を何とかとらえようと本文と格闘した上で、ふと古人の真意や感覚に触れた（ように感じる）時、人間は少しだけ良い顔になるのではなからうか。そのような、人間にしかできない、最も人間らしい営みのお手伝いをする場所が、記念館なのである。

そのためには、『奥の細道』本文の展示では、現代語訳など、わかりやすすぎる説明は排した。文学というのは、「何が書いてあるか」もさることながら、「どのように書いてあるか」がとても重要で、どうして「ことさらに」そのような表現をとったのかを考えることに、読みの妙味が隠れているのである。現代語訳や要約で理解しようとするのは、それとは対局にある態度だ。

その一方で、『細道』本文以外に関連する資料も、可能な限り掲げた。展示では、あくまでも『細道』本文を読みつつ、関連する解説コラムに目を走らせて欲しい。すると、記念館ならではの立体的な展示を通して、通常の書籍形態の注釈からは得られないような発見があるに違いない。

関連資料の中では、特に書簡を重視した。「桃青（芭蕉）は全身俳諧なるものなり」とは、芭蕉の高弟其角の名言だが、芭蕉は人間そのものが文学であり、その機微を伝える書簡こそが、時に作品以上に重要な資料であるからだ。芭蕉の書いた一字から芭蕉の受けた教育について類推した例のように、書簡などの筆蹟資料は、これを現行の文字に置き換えたのでは、失われる情報が多いため、すべて写真図版で掲示している。大垣市民の皆さんには、ふだんからこういったものに慣れ親しんでいただきたいものと願っている。大垣はふつうの町ではないのだから。

以上を要するに、記念館の展示は、かなり歯ごたえのある内容に仕上がっている。あるいはアカデミックに過ぎるとの批判があり得るかもしれない。それでも、芭蕉自身のあまりにも高踏的な生き方を思う時、こういうコンセプト以外の展示のあり方は、私にはちょっと考えられなかった。何とか市民の皆さんのご理解が得られることを祈るばかりである。

ただ、開館すなわち記念館の完成ではない。理想的な文化施設にむけて一步一步近づくよう、これから育て上げる必要がある。そのために何よりも大切なのは、施設よりも人的資源である。学芸員をはじめ、市民ボランティアを含むスタッフが、来館者に対してきめのこまかい対応をすること。意欲的な展示を企画立案してゆくこと。市民の意欲に応えるレベルの高い講演会や勉強会など文化事業を展開すること。以上の事業のために内外の文化人や関係施設と人脈を広げてゆくこと。せっかく立派な施設が出来たのだから、こういった人的資源の方面でも一流の運営を期待したい。

そういった地道な営みを通して、いつの日か、多くの市民の皆さんに、大垣の宝は記念館だと思ってもらえるようになった時、日本の真ん中にあるこの町に、ぽっと小さな灯りがともり、その光は国中に波及してゆくことだろう。